

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. はじめに

ここ数週間のメディアのニュースは、そのすべてが東日本大震災のことばかりである。

地震や津波の被害は、東北三県の岩手、宮城、福島や茨城近郊までに及ぶ未曾有の大災害であり、それに原子力発電所の原子炉事故が加わり、その終息解決の目処も今だたっていない。

ある原子力発電所の事故に対し、エレクトロヒート147号(平成18年5月号)に、技術者として「技術に良悪はない、それをを用いる人間の心にある。宗教的倫理観のない最先端科学技術も、最先端科学技術観の物の見方、考え方のない如何なる宗教も、それは心のない形だけのものだと思う」と述べた。

あれから、満5年たって再び原子力発電所の事故である。発端は天災であるといえる。

しかし、その対応如何によっては結果として、人災となる恐れが存在する。想定外で逃げてはならない。

好むと好まないと問わず、我が国の電力需要量の約3割は原子力に依存している。

人間として、倫理観のある物の見方、考え方で冷静に対処することが必要である。

その為には、無責任な一時的な感情論に支配されることなく、「嘘も方便」的な情報公開、対応策でなく、「莫妄想」を学び知り、決して誤った妄想におちいることなく、「少欲、知足」の日本人の本来の心を再確認していただき、各々の仏教の教えを再び学び考え、国際社会へ国難に対して立ちあがる日本人の心意気を示してもらいたいものである。

そういう意味で情報公開の尚一層の一元化を期待して以下述べることにする。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禳 禪 (野風生)
雅号 樹泉

2. 嘘も方便を学ぶ

一般に、日常語として「嘘も方便」という言葉があり、嘘をつくことを時と場合によっては容認する風潮があるが、本来の意味はもっと深いものがある。

本来の仏教の教えとしての「嘘も方便」について述べると、釈迦(釈尊)が、人々に教えを説くときに取られた手法に由来する。

その手法は「対機説法」、いわゆる教えをきく人々…、すなわち相手の能力、資質、力量に応じて法を説いたのである。それは難解な仏教の教えを相手が、自分の能力に応じて理解するのをまって続けるという手法をとったのである。

その教えの手法は、法華経「方便品」のなかに、「方便」という言葉があり、「方便品」に続く「比喩品」の中に「火宅喩」が説かれている。

その基本的な考え方は、真実の教えに対する一時的な手だてとしての仮の教えとして、「火事に気づかず家の中で夢中になって遊んでいる子供達に、比喩(物事の説明に、類似したものを借りて表現するたとえ)を使い助けだした教えが述べられている。

いわゆる「火宅三車」の喩えからきている教えで、迷いの人間界で、「方便」とは、人々を教え導く巧みな手段、心理に誘い入れるための仮の設けた教えとして述べられている。

それは、苦しみのこの世において、それぞれの困難から脱出するすべを知らぬ人々を教え導くためにとられた手法である。

ところが、我国での「嘘も方便」では時と場合によっては、嘘は必要であり、ゆるされるという意味に解かれて、便宜的な手段、手だてという用いられ方がされているが、嘘をつくことは決して良いことではない。仏教の究極の教えは、あらゆる困難に直面した時に「如何にしたら、この苦しみから脱出できるか」等を考える知恵を与えられたことである。

「方便」は、サンスクリット語のウパーヤを訳した「目的に到達するための方法、手段」を意味する言葉である。鎌倉時代の臨済宗の僧、夢想疎石仏統国師(1275~1351)が「長寿秘訣」として「嘘に心をつかいて、少しの事にも心を勞せり、人は心気だに勞せざれば命ながき事、疑うべからず」と述べ、嘘をごまかすために、また嘘をつく、結果として嘘が嘘を呼んで取りかえしがつかなくなることを述べている。

これ等の教えを考える時、原子力発電所事故は、詳細なデータの報告を心がけるべきであり、決して嘘の報告はゆるされない虚言であるという事である。